

真の自由

佐々木 典子

奨励者紹介[ささき・のりこ]

同志社大学司法研究科教授

[研究テーマ] 法律行為と処分権との関係

イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」

(ヨハネによる福音書 8章 31—32 節)

この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりなさい。奴隷の軛(くびき)に二度とつながれてはなりません。

(ガラテヤの信徒への手紙 5章1節)

キリストにより与えられる自由

今日は、おいでいただきありがとうございます。また、このような機会をお与えいただきましてありがとうございます。今日は、私にとって、キリストがどのような方かということをお話しさせていただきたいと思います。

冒頭のヨハネによる福音書8章 32 節の聖書の言葉は、指導教授からいただいた本の最初の頁に書かれていた言葉です。

私は、その頃すでに、先生が主宰されている召団に毎週日曜日に集うようになっておりましたが、この聖書の言葉を、一つには、日常生活における自由、キリストと共に歩む者としてある状態という意味として、二つには、研究者の端(はし)くれとしての道を歩み始めた者の、研究者としての姿勢・あり方を示す意味として、受け取りました。

それでは、この聖書の言葉には、どのような意味があるのでしょうか。キリストは、最初に、「わたしの言葉にとどまるならば」と言っています。「わたしの言葉」とは何でしょう。そして、キリストの言葉にとどまるならば、知ることのできる「真理」とは何でしょうか。

神の言(ことば)の具現化としてのキリスト

ヨハネによる福音書の第1章には、次の言葉があります。

「初めに^{ことば}言があった。言は、神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(ヨハネによる福音書1章1節—5節)。

さらに、

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」(同 14 節)
とあります。

これらによると、最初に言葉があって、言葉は神と共にあり、そして、万物は「言^{ことば}」によって創造されたとなっています。創世記第1章にも、神が「光あれ。」と言うと、「光があった。」と書いてあり、その後、神は言葉を発し、その度ごとに、大空、水、地等が創造されていきます。先程のヨハネによる福音書1章の冒頭の言葉は、創世記のこの記述を念頭におくもののだと思いますが、大切なのは、神によって発せられる一つひとつの「言葉」の内に「命」があったということだと思います。創造主たる神の言葉、そこに、命があったからこそ、その言葉が万物を造ることができたのです。

そして、聖書は、言葉が肉体という形をとって、私たちの前に現れた、それが、キリストである、というのです。神の言葉は、具現化され、キリストとして私たち人間の目に見える形で現れたというのです。

そうしますと、本日の聖書箇所であるヨハネによる福音書8章31節の「わたしの言葉にとどまるならば」というのは、結局、キリストにとどまるならば、ということになります。

真理＝キリストが私たちに自由にする

それでは、次に、「真理」とは何でしょう。聖書には、

「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと^{まこと}真理はイエス・キリストを通して現れたからである」(ヨハネによる福音書1章17節)、
「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハネによる福音書14章6節)
とあります。

このように、聖書は、キリスト自身が「真理」であり、命であると言っています。

そうしますと、ヨハネによる福音書の言葉は、結局「キリストにあるならば、私たちは、真理＝キリストを知り、そして、真理＝キリストが私たちに自由にする」ということになります。

キリストが私たちに自由にする、ということですが、それでは、「自由」とは、どのような意味なのでしょう。私たちは、「不自由」なのでしょう。確かに私たちは、どこに住んで、何を食べて、どのような職業に就くか・・・など、自由に選択できませんし、また、思想信条の自由は、憲法でも保障されています。

私は、学生の頃、人は結局死んでしまうのだから、生きる意味はあるのか、とよく思っていました。どうせ死んでしまうのだから、一生懸命いろいろなことをしようとしても無駄ではないかと。また—今でもそうですが—あの時、ああしなければよかった、あんなことを言わなければよかった、と思うこともよくありました。こうした状態は、死に囚われ、あるいは、過去の自分に囚われているということ。さらに、他者と比較し、自分に自信がもてなくなることもよくありました。

そして、精神的に辛い、苦しいなどと感じるような時、その原因を探ってみますと、それは、自分の感じ方、

捉え方にあることに気がつきます。表面的には、他者など外界の種々の事情が原因になっているようにも見えますが、突き詰めて考えますと、自分をよく見せたい、肯定したいという思いがあることに気がつきます。自分への執着、自我です。そして、何よりも厄介なのは、自分で自分に囚われていることに気がついたとしても、そうした自分を自分では捨てることができないことです。自己への執着を自分ではどうすることもできないのです。

本日の聖書の箇所で読みました、ガラテヤの信徒への手紙を書いたパウロは、ローマの信徒に対しても手紙を書いているのですが、この手紙の中のパウロの言葉には、自我に苦しむ者の姿が表れています。少し長くなりますが、引用します。

「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。(中略)そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。『内なる人』としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。(中略)わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです」(ローマの信徒への手紙7章 15—25 節)。

この手紙で表現されているパウロの姿は、心では善を願っていても、願った通りのことができない人間の矛盾した状態をよく表しています。そしてパウロは、善を願っても行えない状態を、自分の内に罪が住んでいると表現しています。パウロは、肉体を宿とする人間が自我から逃れられない状態を罪と捉え、罪の意識に苦しんだのだと思います。

自己への囚われからの解放

このように自己の内にある罪に苦悩したパウロですが、このパウロは、ローマの信徒への手紙8章で、次のように、高らかに宣言しています。

「今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです」(ローマの信徒への手紙8章 1 節—3 節)。

ここでパウロは、死から生への大転換を果たします。罪の意識に苦しんでいたパウロが、キリストにある者は罪に定められないと言うのです。なぜなら、キリスト・イエスによって罪と死の法則から解放されているからだと言うのです。

最初にあげましたヨハネによる福音書8章の「真理はあなたたちを自由にする」とは、キリストが私たちを自由にする、ということです。これは、パウロによれば、キリストが私たちを罪と死との法則から解放したということになります。私は、これを自分では捨てきれなかった自分自身というもの、つまり自己執着から、キリストが、私を完全に解放してくれたと受けとっています。

キリストの十字架による贖い=愛の絶対性

そして、聖書において、この「自由」とはキリストが自ら十字架で代償を負ってくださったことによって、与えられた自由であるとしています。

聖書には、次の言葉があります。

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」（ローマの信徒への手紙5章6節—8節）。

ここで、聖書は、キリストが「善い人」のために死なれたのではなく、罪人であった、私たちのために死んでくださったとしています。キリストは、私が価値ある人間だから私の代わりになってくださったのではないのです。

また、聖書には、次のような言葉もあります。

「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」（マタイによる福音書5章45節）。

こうした絶対的なキリストの愛は、次の聖書の言葉にも表れています。

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」（ローマの信徒への手紙3章23節—25節）。

十字架を通して与えられる義

ここで「神の栄光を受けられなくなっている」とありますが、これは、神様の前に立てないということだと思います。聖書には、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」（マタイによる福音書6章33節）とあります。神様を第一としなさいということだと思いますが、人は当然自分が第一であって、神様を第一とするということはできません。人間である以上、神様を第一にするということは無理なことなのです。そして、こうした人の状態が、「神の栄光を受けられない」ということ、神の前に立てないということだと思います。

でも、神様を第一とできない、そういう意味で罪人であった私の代わりに、キリストが十字架に掛かって死んでくださったと、パウロは言っているのです。自分で自分を捨てようとしても捨てられず、自己執着から逃れられない人間を、キリスト自身が、自己の死という代償を払って、囚われから完全に解放してくれた、と言うのです。まさに「与えられた義」です。私の努力に対するご褒美ではなく、キリストの十字架を通して、無償で与えられた義（ただ）しさです。無償で与えられたからこそ「恵み」であり、ここに神の愛が示されたこと、パウロは言っていると思います。

私の代わりにキリストが十字架に掛かってくださったと思う時、私は次の聖書の箇所を常に思い出します。

イザヤ書53章には、キリストについて「見るべき面影はなく」（2節）とあり、「彼は軽蔑され、人々に見

捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。(中略)彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と」(3節—4節)とあります。この箇所は、キリストの十字架を予言した箇所だといわれますが、私は、キリストがこうして私の痛み、悲しみを負ってくれているのだと思っています。そして、キリストが私の弱さ、マイナスなどすべてを十字架で負ってくださった、だから、もう自分を見て、後悔し悩む必要はない、と。

キリストは生命(いのち)を与える

マルコによる福音書を読みますと、会堂長ヤイロの娘の話が出てきます。会堂長とは、会堂の管理をする人というようですが、ヤイロは、娘が死にそうになっているから手を置いてほしいとイエスに頼みます。でも、ヤイロの家に行く間に、会堂長の家から人々が出てきて「お嬢さんは亡くなりました」と告げるのです。それでも、キリストはヤイロの家に行きます。そして、イエスは、横たわっている子の手をとり、「タリタ、クム」(「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」というと、その子はすぐに起き上がって、歩き出したとあります(マルコによる福音書5章21節—42節)。これ以外にも、マルコによる福音書には、キリストが病人を癒す記事がいくつも出てきますが、こうした癒しは、キリストが、病等人の負の部分の片づけただけでなく、人に生命(いのち)を与える方であることを表していると思います。

キリストにより与えられる力

そしてキリストは、自我への囚われから私を解放し、私が私らしく歩いていく土台を据えられただけでなく、日々歩いていく力も備え与えてくれていると思います。

先に、「まず、神の国と神の義とを求めなさい」という聖書の箇所を引用しましたが、実は、聖書はその前の箇所でも、次のようにも言っています。

「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである」(マタイによる福音書6章31節—32節)。

だから、「神の国と神の義を求めなさい」と、聖書の言葉は続くのです。

共にいてくださるキリスト

必要な物はすべて神様が備えてくださる。だから、心配せずに歩いていきなさい、と神様は言っているのです。

しかも、キリストは私たちと共にいてくださる、とも言っています。

「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は真理の霊である。(中略)この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」(ヨハネによる福音書14章16節—18節)。

私に必要なものはすべて備えてくださるだけでなく、常にキリストが共にいてくださる。このことは、種々の

ことが重なって意気消沈し、どうしていいか分からないような時、いろいろと思わずらって、今日はしんどいと感じるような時、私にとって、大きな慰めでした。何か具体的に解決策が与えられなかったとしても、一人で負っているのではなく、キリストが共に負ってくださると思いますと、今抱えている状況をなんとか乗り越えられるように思えました。

しかも、「知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れて」いる(コロサイの信徒への手紙2章3節)のですから、何も心配せずに、キリストに委ねていけばいいのです。

そして、聖書には、「知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます」(ヤコブの手紙1章5節)ともあります。このように必要な知恵は願えば与えられますので、安心してキリストに委ねていけばいいのです。

今日、お話しさせていただきたかったのは、キリストの十字架を通して与えられた自由は、人を縛る自我、自己執着というものから人を解放したこと、そして、その人がその人らしく生きていく土台を据えてくださったことを知っていただきたいということです。そして、囚われから自由にされた以上、奴隷の軛につながれることなく、過去のことあるいは自分も含めた種々のことにとらわれずに、自分らしい歩みをしてほしい、ということです。「この自由を得させるために、キリストは十字架に掛かってくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の^{くびき}軛に二度とつながれてはなりません」(ガラテヤの信徒への手紙5章1節)。

最後になりますが、目に見えるものだけがすべてではないことに気がついてほしい、そして、今日お話しさせていただいたことを通して、聖書に興味をもっていただけたらと願っております。聖書には、確かに分かりにくいところもあるかもしれませんが、種々の問題に遭遇したときに慰めとなる言葉もたくさんありますので。

2021年9月29日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録